

戦争の悲惨さを後世に伝えたい！

藤枝市遺族会 神谷陽子

私の父は、昭和19年10月に出征し静岡の三十四連隊に入隊、その翌日満州に渡ったそうです。満3歳の長女と1歳の次女を残し、そして、母は私を身ごもり臨月の身でした。その時の父を見送る母の気持ちは、いかばかりかと思うと胸が熱くなります。また、父も私の誕生をどんなにか心配してくれたかと思えます。

それから数日後、私はへその緒をふたまわり半も巻いて誕生しました。お産婆さん（助産婦）が、この子はよく命があった、すごい生命力だと喜んで下さったそうです。母は父の元、戦地に「陽子」と名付けたことを手紙で知らせました。当時、戦地からの手紙が届くことは容易な事ではなく、内容によってはそのままになってしまう様ですが、無事に手紙が届き、父からは「陽子はいいい名前だ。元気で育ってほしい、そして太陽の様に明るく人の為に役立つ人になってほしい…」と、手紙の内容を理解できる年頃、中学生になってから母がその手紙を見せてくれました。親の思い、願いが今になってより深く理解でき、父の顔も写真でしか見ることができませんが、私にとってはその手紙が一番の宝物であり、心の支えでもあります。

母は私達三人の子供をかかえ苦しい時代、昼夜とわず一生懸命働き続けて育ててくれました。子供の頃、夜中に目が覚めると母は仕立物の縫い物をしていました。いつお母さんは寝るんだろうと不思議に思った事もありました。また、今でも思い出すことは、月夜の晩、裏口の戸口がガタガタはずす音が聞こえてきました。母は3人の子供にだまって！と指示を出し、泥棒が戸口に手をかける瞬間を見はからって、大きな声で「誰だ!!」と怒鳴りました。その声にあわてた二人組の泥棒、一目散に逃げよう

としたが、家の横にある小さな池に足をすべらせながら逃げて行った事をよく覚えています。必死で子供を守る母の姿…。一心に働いた母の支えは、やはり父への思いだったと思います。その母も96歳で父の元へと旅立ちました。

母は何かある度に「お父さんに会ったら三人の子供達の事を報告するから…」とよく言っていました。今頃母は、父と沢山の話をしていることでしょう。

戦後77年経ちました。戦争は生き地獄です。戦争の悲惨さ、恐ろしさを後世に伝え、二度と繰り返さない為にも、その記憶を風化させることなく、次の世代に継承していくことが、私達遺児に課せられた使命だと思います。これからも私達藤枝市遺族会女性部は自分の体験を、そして平和への願いを込めて語り部として活動していかなければ消滅してしまう。今だからこそ、私達が直接

何かできる訳ではありませんが、戦争を知る人が減り、多くの人がある本当の悲惨さ怖さを知らないでいれば、武力で問題解決すればよいという考えを持つ人が増えてしまいます。私達遺児は、子や孫、ひ孫まで尊い生命を祖国の為に捧げたかけがいのない父親を失った悲惨さを後世に伝えていかなければ、と切に思います。

戦後70余年過ぎて、亡き父と母を知る 藤枝市遺族会 塚本真人

昭和20年6月9日、名古屋上空を襲ったB29は、僅か8分間、一瞬にして街全体を灰燼と化し、一万数千の死傷者を出したと言われています。

私の父塚本峯雄は愛知時計という軍需工場に勤めていましたが、ここも、紅蓮の炎に包まれ巨大な建物は敗戦の日本を象徴するかのようになり崩れ落ち、自らも悲惨な戦争の犠牲となり31歳の若さで命を落としました。

間もなく迎えた灼熱の太陽のもとでの終戦、そして、瓦礫と化した街を容赦なく北風が吹き抜ける厳しい冬もあつという間に訪れ、昭和20年も暮れようとする時、母は4歳の姉を抱え生活難にあえぎながら郷里静岡に戻りました。

私は母つゆの実家の部屋の片隅で、かすかな産声をあげました。二年生を頭に5人の甥姪のいる中での居候生活、長期にわたってお世話になることは、肉親であればあるほど、日増しに精神的な悩みも加わったようでした。

しかし、姉幸江も私もこうした母の心労を理解するにはあまりにも幼過ぎ、栄養失調で生まれた私は、母にとってお荷物だったようで、野良仕事から帰ったら死んでいてくれるかしらと思ったこともあったそうです。そんな私を背負い、姉の手を引いて瀬戸川の土手に佇んだことも、夕焼けの空にねぐらへ帰る鴉でさえ親子連れなのにと、涙した日もあったと聞きました。

7年後、実家を出ました。農家の日雇い、籠を背負っての行商を始め、やがて小さな店を始めました。生活保護を受けながらの暮らし、経済的には苦しかったはずですが。しかし学校へ持って行くお弁当だけは一日も欠かすことなく持たせてくれました。軍属の妻子に対する特別給付金が支給され始めたのは昭和38年。母の口癖は「一日も早く 納税義務者になりたい」という言葉でした。

以来、多くの人に支えられ、母は平成24年、92歳で逝きました。晩年は5年間の車椅子生活でしたが、介護施設のデイサービスから帰ってくるたびに、何かにつけて「今が一番幸せだよ、ありがとう」とよく言ってくれていました。

平成30年、父の命日の日、偶然にも『紺碧の空が 裂けた日 (愛知時計・愛知航空機爆撃体験手記)』という本の中に、父を親友だという5歳年上の中

村久夫さんの「夫婦の絆」と題した手記を見つけました。

そこには、「6月9日の朝礼の時、みんなの姿ははっきりと見えているのに、親友の塚本峯雄君だけがボウと見えて、いくら目を擦ってもよく見えない、これが俗にいう影が薄いということかと思い、塚本君向かって、『おい、塚本君、今日は君の影が薄いから、もし会社が爆撃されたら君は死ぬかも知れんぞ、今から早退して帰れよ』『馬鹿野郎、この戦時下に死ぬかも知れんなんて言って早退ができると思うか、馬鹿なことをいうな』と、そんな書き出しから始まり二人のやり取り、防空壕での様子「ここは危ないから僕は他へ行く」と飛び出した父、最後に二人が名前を呼びあった瞬間まで、克明に書かれていました。私は写真の顔の父しか知りませんが、父のその瞬間を垣間見た気がしました。そして、その後の母の様子も書かれていました。

父は常々母に「愛知時計が爆撃されたと聞いて、一夜明けても帰らなかったら、リヤカーを引いて、遺体を取りに来てくれ」と言っていたそうで、9日、最終電車まで待っても帰ってきませんでした。

母は夜明けを待って、甥っ子と二人、リヤカーを引いて二里半の道のりを急いだそうです。道々夫の声で、「日比野にいる、日比野にいるよ」と何度も聞こえたので、日比野の遺体収容所に直行し何の苦労もなく夫の遺体のおいてある場所に行けたというのです。これが夫婦の絆というものでしょうかと涙ぐんでおられ、そして、「塚本の形見です」と言って、亡くなった時刻の記入された戸籍抄本と写真を私にくださり、淋しそうな姿で田舎に帰って行かれたと…これを読み返すたびに、父を偲び、悲しみのどん底の中、必死に耐え乗り越えてきた母を想い胸が熱くなります。

実はこの本、18年ほど前、中村さんのご子息（博史さん）が、「父が生前ずっと気にかけて大切にしていたものです」と、当時、母が中村久夫さんに託した戸籍抄本と写真と一緒に本籍地をたよりにはるばる届けに来てくれていたものでした。

終戦から70余年を過ぎた今、母と中村さんが再会できていたら、どんな話をしていただろう。積もる話も山ほどあっただろうに。

遠い異国で死闘を繰り広げ家族を想いつつ散った人たち、残された多くの遺族、それぞれの辿ってきた道、悲惨な戦争の修羅場をくぐり抜けてきた多くの貴重な体験があることを、時の流れの中で風化させてはならないと改めて感じます。

恒久平和を願って

藤枝市遺族会 服部之子

母は2人の女兒そして間もなく生まれる予定の3人目をお腹に身ごもり、貧しくとも幸せな私達親子を、突然絶望と不安に落とし入れたのは、一枚の「赤紙」召集令状でした。

僧侶であり、私立高校の教員でもあった父は、戦争が益々厳烈を極めた昭和19年10月、母と姉妹を残して出征しました。出征後間もなく三女、妹が産まれました。当時の教育を受けた人達は「名誉な応召」と言われ、母は涙を見せることも出来ず、父を笑顔で送り出したそうです。

そして3日程経って「満州のハイラルの方に出発 返信無用」のたった一枚の葉書が届いたそうです。その手紙で満州方面へ行ったことが分かりましたが、その後の消息については全く分かりませんでした。母は毎日毎日心配ばかりしていました。

そして、ここから母の苦勞が始まりました。母はいつも私達に、『父親がいないのだから人様に後ろ指をさされるような事はけっしてしないように！「女手一つで育ててきたけど皆ないい子に育ったね」と言われるように頑張ってもらいたい！』といつも口ぐせのように言うておりました。そして自分なりにふりかまわずに、只々、何としてもこの三人の娘達を育てていかなければならないと、大変なこと、いやなこと歯を食いしばって頑張ってくれました。その後ろ姿を子供の私達はずっと見てきました。

幸いな事に、母は若い頃習い覚えた事、洋裁、和裁、編物等の腕を生かして、人様の着物を縫ったりしながら、一枚縫えば今夜の夕食代にと、夜となく昼となく必死で頑張ってくれました。そんな中で、私達三姉妹も常に母に心配をかけないように、仲良く、出来ることは助け合ってやってきました。

そして終戦を迎え、1年経ち、2年経ち、何の消息もなく、母は毎日のようにお父さんは今どこにいるのかなあ！きっと遠い海の向こうから三人の子供達のこと見守ってくれているんだよ！と耳にタコが出来るくらいに、いつもいつも私達に言い聞かせてくれていました。

お父さんはいつかきっと帰ってきてくれると、母も私達も信じて待っていましたが、いつまで待っても帰ってこないし、もし戦死していたならば、お父様も成仏出来ずにいるのではないかと近所の人達から言われ、それならば早くにお葬式を出してやった方がいいのではないかと勧められても、父は必ず帰ってくることを信じて待っていました。戦死の知らせもなく、つらく、悲しく、悔しい想いのやり場もなく、只々納得できないまま、皆様にお願ひし、私が高校

二年生の時にやっと気持ちを納めてお葬式を上げさせて頂きました。

尊い多くの人々の生命を奪った戦争…

人々の幸せを奪った戦争…

そして多くの人々を苦しめ不幸のどん底へ追い込んだ戦争…

もう二度と戦争は起こさない、戦争は絶対にしないようにして下さい、と願わずにはられません。

日本はじめ世界の人々が平和でありますように心から願います。

母への感謝

藤枝市遺族会 小柳八州子

私の父は満鉄に勤めていました。昭和19年6月現地召集でフィリピンのルソン島に出征、私が1歳半の時でした。昭和20年4月マラリアによる戦死。

母と私は翌年の昭和21年10月に帰国しました。着る物、写真も全て持って来れず、貯金通帳も使えず、全てを失ってしまいました。コロ島の収容所では、あわ、ひえの御飯を1日2杯だったそうです。

日本に帰る為、トロッコのような列車に乗り、船で舞鶴まで来ました。船に乗って来る途中、エキリになって死んだ子供達は、そのまま海に投げてその周りを一周して手を合わせて帰って来たそうです。

その2年後、昭和22年5月2日、戦死の知らせが届き、母は私をかかえてどうして食べていこうかと考え、私を祖母に預けて住み込みで就業し、言葉では言えない程の苦労をしました。

母と一緒に生活出来たのは、私が中学一年生の時でした。

あの戦争がなかったら、家族団らんの時があったのに！と思うと悔しい気持ちでいっぱいです。

父も私達を見守ってくれ、母は今年99歳です。

私は戦争遺児として、戦争の悲惨さを後世に伝え、世界中が平和で安心して暮らせと一緒に頑張っていきたいと思います。

戦争を二度と繰り返させないために

藤枝市遺族会 深見和子

私の父は海軍でした。昭和19年10月レイテ湾にて戦死。遺骨が来たのは昭和21年頃と母から聞きました。

親子3人で生きていくために、母は編物の資格を取得し、教室を10年の余続け、私達姉妹を育てて下さいました。

母の苦労を見て来た私は、母だけには心配かけないようにと、いつも思って

いました。

主人から、静浜の飛行場を飛び立つ若い特攻隊員、静岡の空襲で大勢の生命が一瞬にして消えていく様子を、目の当たりで見たという話を聞きました。

こんなに惨^{むご}くて悲惨な戦争を2度と起こさないように、私達が伝えていかなければならない使命があると思います。

桜散る 護国の御霊^{みたま} 永遠^{とわ}に生き

戦争の傷跡

藤枝市遺族会 秋元ゆき江

私の義父は、6歳を頭に3歳、0歳と3人の幼な子を残し、ボルネオ島で戦死しました。台湾の高雄から届いた最後のハガキには、検閲で黒く塗りつぶされながらも…「炎天下で暑い、気分が悪い、上等兵さんや戦友の人達に世話になり、やっと元気になりました。」と書いてありました。

他にも、主人から何通かの手紙やハガキを見せてもらいました。その時の主人は、うなずきながら、手紙やハガキに託された父親の思いを深くかみしめていた様でした。親子の血のつながりの深さに、私も思わず涙を流した事もありました。

一家の大黒柱を戦地に送り出し、残された家族は、父の無事をただただ祈りながら、歯を食いしばり、今日を明日へとつなげていくのに必死な生活を送っていました。

このような悲惨な戦争があった事を、私達は決して忘れません。

もう二度と戦争はしてはいけない……戦争を知らない若者たちへ、そう語り継いでいかなければならないと思います。

父と母への想い

藤枝市遺族会 増田久代

私の父は、昭和19年4月に出征し、その年の7月にサイパン島で戦死しました。戦地から帰って来た父の友人がたずねて来てくださり、母は当時の事を色々と聞いたそうです。

父達の乗った船は襲撃されて、必死の思いで泳ぎ、戦友と一緒に島に上ったそうですが、父は帰って来なかった。本当に残念だったと幼い頃よく母から聞かされていた事、今でもよく覚えています。

父はきっと家族の事、子供の事を思いながら必死だったと思うと、私も胸があつく、こみあげてくるものがあります。父は体格もよく力持ちで、子供達に相撲の指導をしたり、また、町内で行う相撲大会に毎回出場していたそうです。

優勝旗は、今でも宝物として大事にしてあります。

母は、生後8か月の私と祖父母をかかえての生活で、農作業で昼も夜も働き続けたいへん苦勞しました。私は幼い頃、母はいつ寝るのかなあとと思った事もあります。そんな母も祖父母を見送り、やっと自分と向き合える時が来た頃、51歳の若さで父の元へと旅立ちました。もっともっと母から父との思い出話を聞きたかったです。悔しかったし残念でたまりませんでした。

力強く生き抜き、一生懸命頑張って育てて頂いたお陰で、私は今かわいい孫達に囲まれて幸せな毎日を過ごせている事を父・母に感謝しています。

二度と悲惨な戦争を繰り返さない為に、恒久平和を願っています。

フィリピン慰霊巡拝の旅

藤枝市遺族会 川久保光代

父は、私が2歳の時出征、そして終戦直前の昭和20年7月22日にフィリピン・ミンダナオ島で戦死、33歳でした。遺骨も形見の品もありませんでした。ただ残された父からの葉書や遺書には、家族に対する愛があふれており、読む度に胸がいっぱいになります。

私はせめて父が眠る地へと、平成31年3月「慰霊の旅」へ参加させて頂きました。最後の数カ月は食糧も絶たれ、飢えと酷暑、武器も不十分で、移動は真夜中と、とても過酷な状況だったそうです。それでも英霊の皆様は国を信じ、家族を案じながら散華されたのです。

3月のフィリピンは初夏でした。父がきっと目にしたであろう同じ景色を見た時、涙があふれ出し、止まりませんでした。父はどんなに生きて帰りたいと願っていたことでしょう。

父の戦死後は、母の実家での肩身のせまい居候生活が10数年続きました。その後、母は二人だけの暮らしを求めて、住み込みで市の職員として老人ホームの職を得て、30年近く勤務し、国から永年の福祉功勞に対し表彰されました。そして93歳で父の元へと旅立ちました。父は母を見つけてくれたのでしょうか。

私は、逆境に立ち向い頑張り抜いた両親を尊く誇りに思います。

そして、私達は多くの英霊の想いを無駄にせず、将来の世界の安泰を強く強く願います。

母の苦勞に感謝

藤枝市遺族会 西谷芳子

昭和16年3月、私の誕生に両親の喜びも束の間、これも運命とは申せ、我が家にとって青天の霹靂^{へきれき}、一枚の召集令状が届きます。俗に言われる赤紙でし

た。当時はどうする事も出来ず従うしかない事で、母は生後百日目の私を抱いて、大阪駅に父を見送りに行きました。心中母はどんな気持ちで見送った事か、そして父の心中はいかばかりであったか。今思うと胸が締め付けられる思いになります。

幼い頃良く母から聞かされた事は、父は私をだっこしながら、元気でやさしい子になれよと、いつも口ぐせの様に言っていたそうです。

3歳の時、B29が来る、山に逃げろと言われた直後、上空に来たので草原に身を伏せた事覚えています。また空襲警報が鳴ると、隣の防空壕に避難した事もありました。又、母は夜中に靴の足音がすると、父が帰ってきたのではないかと、いつもそう思い信じて待っていたようです。

時過ぎて3年後、突然父の戦死の知らせが届きました。母にとって親子で見送った大阪駅は忘れようも有りません。父は父で子供の成長をどんなに夢見た事か。当時軍の機密保持等の事情で戦没場所を明らかにされなかったのですが、母にとっては白木の空箱一つでは納得出来ず、せめて戦没地点をどうしても知りたいと何度も申し上げたところ、何とか返答を頂く事が出来、東部ニューギニア・ソナム、昭和19年12月19日と知らされました。

いつかはきっと帰ると、心の隅にはお互いにあった筈、父はどんな思いで亡くなったのか。母は現実を目の当たりにして、親子の苦労が始まりました。

昼は農作業、季節には茶摘みの手伝いに遠く家山まで出掛け、帰宅すれば夜遅くまで編物をして生活の足しにし、生きていくのがやっとの働きづめの毎日を送って、頑張り続けてくれました。

何とか成長した私、21歳の時、東京女子医大で心臓の手術を受けました。当時は我が家にとって莫大な医療費であり、母は父の恩給を前借して何とか支払ってくれたようでした。一大事の時ほど、父親の存在を欲しかったに違いありません。子をもって親の恩を知る私でした。

やがて母はきっと私の事を聞かされる事でしょう。その母は97歳で父の元に旅立ちました。